



四 専属作家に

ポッパの感情のない声が部屋の隅のマイクから流れてくる。その声を聞くと、秋鼻たちは、先ほどの休憩のときと同じように、パブロフの犬がダッシュするかのよう、自分の席に戻って、ヘッドホンに装着した。

「まだ、話の続きが・・・」

良太は秋鼻さんの背中に向かって声を掛けるものの、ヘッドフォンを装着した秋鼻さんには聞こえないのか、振り向こうともしない。再び、

「お仕事の時間です。お仕事の時間です。皆さん、直ちに席についてください」

と、ポッパの登録したような声が鳴り響く。

「何度も言わなくても、わかっているよ」

聞きたいことが教えてもらえなかったのも、ポッパに八つ当たり気味の良太。それでも、床からは動こうとしない。すると、体中に電気が走る。髪の毛が逆立つ。体中の産毛がハリネズミとなる。みんながパブロフの犬になるのはこういうことか。

「お仕事の時間です。お仕事の時間です。皆さん、直ちに席についてください」

再び、容赦ないポッパの声。やばい。

「すぐに席に着くよ」

良太もここは体はハリネズミで、心はパブロフの犬になって、急いで自席に着いた。

「ヘッドホンを着けてください」

監視カメラで見ているのか、ポッパの声が続く。

「わかっているよ」

電気はもうこりごりだ。肩こりを治そうと銭湯の電気風呂に入ったことはあるが、その時は、肌

がピリピリする程度だった。だが、ここの電気は許容量を越えている。痛いを通り過ぎ、気絶しそうだ。ロボットのポッパーには、人の痛みがわからないのだ。

しゅしゅとヘッドホンをつける。ヘッドホンからは、「小説をかきなさい。小説を書きなさい」という低音重奏のフレーズが、クラシック音楽の曲に乗って、脳に刻みつく。

「思い着かないんだよう」

ついに、良太の神経が切れた。キーボードを投げ出す。その時、パソコンの画面に、ユーミンの「恋人がサンタクロース」の曲とともに、メールが届いた。

「何だ、これは。爆弾メールじゃないよな。どうせ、このパソコンが壊れても、俺の物じゃないから、まあ、いいか」

良太は画面の封筒の絵をクリックする。

「お疲れ様です。小説のネタがないようでしたら、私の方が提案します。あなたの好きなジャンルの一つのファンタジーはどうですか。ずばり題名は「バリー・ポッパー」です」

その文面を見て、良太があきれたように返信する。

「ハリー・ポッターじゃないの？」

「いいえ・バリー・ポッパーです。あなたもご存じの、本屋で受付をしているロボット「バリー・ポッパー」が、一人前のロボットになるために、寄宿舎に入り、ロボット学校で空を飛んだり、山の中を走ったり、海の中を潜ったりするファンタジーです。もちろん、ポッパーを助けるロボット教授や、反対に、ポッパーを陥れようとする、悪の軍団も登場します」

「それって、どう見ても、魔術師とロボットを入れ替えただけで、ハリー・ポッターのパクリじゃないの？」

「パクリじゃありません。ハリー・ポッターにインスパイアされただけです。それに、パクリでも、何でも、面白ければいいんです。有名で、人気のある作品でも、過去の作品の何かを踏襲、つまり、物まね、パクリをしているんです。そもそも、人間が言葉を使うこと自体がパクリなんです。パクルことで、人間の文化、歴史は豊かになったんです。もちろん、その進化の先のAIも」

確かにポッターの言うことは一理ある。言葉を覚えるのも、勉強するのも、先人の知恵や知識を吸収し、それを実践したり、応用したりするためのものだ。何事も、まずは物真似から始まる。無から有を、何かを生み出すことなんて無理だ。発明だって、何らかの事象を物真似して、応用して生み出しているだけだ。ある研究をしていて偶然や失敗から、新たなものが生み出されることは多い。物真似こそが人類の進化の一步なのだ。

「わかったよ。でも、バリー・ポッパーは勘弁して。もう少し時間をくれるかな。他のネタを考えてみるよ」

良太は物真似の重要性を認識したものの、さすがに「バリー・ポッパー」は直接的なパクリすぎだ。どうせパクるなら、片方の口角が上がるような、知的遊びに溢れた、もう少し、しゃれっ気のあるパクリをやりたい。それが、パクリ作家のせめてもの意地だ。

「わかりました。私も無理には強制しません。それでは、物真似から創造力を発揮して、これまでにない作品を書いてください」

ポッパーからの返信は途絶えた。ほっとする。だけど、ポッパーにあんなこと言っておきながら、作品のアイデアは思い浮かばない。何か、ヒントはないかと、ポッパーの言う通り、これまで自分が読んできた作品を思い出す。

一番好きだったのは探偵小説だ。探偵小説ならば、レイモンド・チャンドラーの「大いなる眠り」や「長いお別れだ」、そして「さらば愛しき人よ」だ。私立探偵のフィッツリップ・マーロウに憧れ、麦藁帽子を被ったり、吸えないタバコを啜えたり、どてらを羽織ったりしたものだ。

そうだ。チャンドラーへのリスペクトで、「小さな目覚め」とか、「短い出会い」とか、「こんにちは、憎き人よ」はどうだろうか。模倣や、パクリやパロディじゃない。これは、あくまでも尊敬の念から生まれたものだ。

題名は、「小さな目覚めから、短い出会いで、こんにちは、憎き人」だ。愛読する三作品を全て網羅しているぞ。ストーリーはこうだ。定年退職した元刑事が、公園の草抜きや交通安全活動など、地域のコミュニティ活動に参加しているうちに、近所の人々に起こる盗難や殺人事件を解決しようとする。やっと犯人を突き止めたものの、事件を起こした動機や原因は、長生きしすぎたために年金だけでは生活できなくて貧困に陥ったことや、認知症を発症して理性を失ったことによることが判明する。

元刑事はやりきれなさを感じるとともに、やがていつかは自分にも起こりうるのだと生を受け入れる。罪を憎むのではなく、人を犯罪へと導いてしまう社会のあり方、人間の真の姿に焦点を

当てるのだ。

これなら、まさに現代に生きる人々の共感を得るだろう。さあ。覚えているうちに、パソコンに入力だ。思いつくままにストーリーをあらあらと書く。後は、これに枝葉をつけたり、花を咲かせたり、反対に、枝打ちしたり、つぼみを摘むんだりする。そして、話を膨らましたり、起伏をつけるだけだ。

良太が取りあえずのストーリーを打ち終わると、

「これは面白いストーリーです。添削を重ね、早く作品を完成させてください。それと、あなたにもペンネーム、筆名が必要です。本名の良太では、読者が本を手にとったときに、ガクツときます。そうですねえ。レイモンド・チャンドラーに敬意を表して、レモネード・チャンはどうでしょうか。外国人名の作家が不足していたところですよ。よろしく」とすぐさま、ポッターからメールがあった。

えっ。俺が作品を書いたことを何で知っているの。そうか、このパソコンに入力しただけで、全ての情報がポッターに提供されるんだ。迂闊なことは書けないな、と良太は今後、用心することを肝に命じる。

それにしても、まだ、作品が出来あがっていない状況で、ペンネームが先に決まるのも、少し照れる。でも、いきなり、外国人名のレモネード・チャンか。コカコーラやサイダー、オレンジジュースは知っていても、レモネードだなんて、今の人は、誰も知らないだろう。それに、チャンだなんて、中国系のように思われる。有名なテニスプレイヤーや歌手もいたな。

もう一度。呟く。レモネード・チャン。まあ、いいか。それに、何だか、外国人になった気がしてきたぞ。そう言えば、武士は成長するごとに、名前を変えていたぞ。ブリなどの出世魚もいる。体が大きくなったら、服も変える。それと同じように、作品を書くたびに、名前を変えることもいいのかもしれない。良太というありふれた名前では推理小説は書きづらい。まして、外国人が主人公なのに、作家が日本人名では違和感がある。スマホの画面の保護シートに空気の泡が入ったかのように、ぴったしこない。

よし。これから、俺は、レモネード・チャンだ。探偵小説に挑戦だ。作品名は少し長いけれど、予定通り「小さな目覚めから、短い出会いで、こんにちは、憎き人」だ。当初は、主人公は日本人としていたけれど、アメリカ人に変更だ。それに、ついでに、自分が日本語で書いたのに、翻訳小説の形式にしてしまうおう。翻訳者が日本人の良太ならば、違和感はない。これは思白い思い付きだぞ。休火山が急に噴火したように、心が燃え上がってきたぞ。よし、今からだ。良太は、いや、レモネード・チャンはパソコンのキーボードをもぐら叩きのごとく、打ち始めた。

それから、数日間、レモネード・チャン（作品を書き終わるまではレモネード・チャンと呼ばしてもらおう）は、寝る間を惜しんで、作品を書き続けた。作品を書き終わらなければ、地下室から出られないということではない。申請さえすれば、自分の洗濯や掃除、気分転換の散歩など、自由に書店の地下室に出入りできる。だが、良太は自ら背水の陣を引いた。作品を完成するまでは地下室から出ない。職場は2、3日休む。とポッパーに宣言した。そのことを申告すると、1時間に10分の休憩時間だけは強制的に取らされるけれど、深夜になっても空調や電気はつけたままの状態にしてくれた。仮眠を取りたいと言えば、自然に、常夜灯になる。

また、腹が減っては作品が書けないので、ラーメンやカレー、サンドイッチなど食べ物は部屋の隅にあるダムウェイターから定期的に提供されるほか、牛乳やコーヒー、野菜ジュース、はちみつレモン、甘酒、しるこなどは、自動販売機から無料で自由に飲むことができた。座ったまま背伸びをすると、天井から機械の手が伸びてきて肩まで揉んでくれた。まさに至れり尽くせりだ。

「できた」

レモネード・チャンは、もう何回も見上げ続けた天井に目を遣った。プラスターボードにしみのようなものが見えた。以前は、全く気がつかなかったのに、今ははっきりと見える。しみはまるで世界地図のようだ。レモネード・チャンの意識は、作品が完成するとともに、しみのアメリカ大陸からしみの日本に戻ってくると同時に、名前も本名の良太に戻りつつあった。

「レモネード様。お疲れ様です。作品は完成のようですが、もう一度、作品を読み直してください。漢字の誤りや無駄な表現、無理な会話、つながらないストーリーに、気がつくことでしょう。何事も最後の詰めが大事です」

パソコンの画面にポッパーから冷静沈着な発行人・編集者の視点によるメールが届く。

「ええ、ようやく脱稿したのに・・・」

レモネードはもう一度天井を見る。意識は、しみの日本からしみのアメリカ大陸にトンボ帰りし、半身以上は良太だったのが全身レモネードに戻った。気を取り直して、作品をスクロールして、最初から、目を通す。時には、声を出して読んでみる。自分が書いたはずなのに、へえ、こんなことを書いたのかと感心したり、これは全然ダメだ、意味がわからないと文章を全面的に書き変えた箇所もあった。

当初は、ポッパーからの指示に不満があったが、言われて、再度、見直すと、自分が書いた作品だけど、良い点も悪い点も、客観的に判断することができた。また、文章を書いていた時の高揚

した自分の気持ちも再確認できてよかった。一旦、地下室から出て、職場に復帰した後に、仕事の帰りなどに地下室に戻り、数日を掛けて文章を推敲した。おかげで、自分が納得できる作品が完成した。その作品は紙ベースとインターネット上で出版された。

作者名は「レモネード・チャン」作品名は「小さな目覚めから、短い出会いで、こんにちは、憎き人」この本を実際に手に取る。重いような軽いような。でも、パソコンで書いていた時にはそれほど思わなかったけれど、こうして、紙の本を触ると、作品を書きあげたという充実感が一層込み上げてくる。

「やったな。レモネード。お疲れ様」

誰かが肩に手をそっと置いた。手のひらのぬくもりが伝わる。振り返る。秋鼻さんだ。

「ありがとうございます。秋鼻さん」

「私は、今は、秋鼻じゃないんだ。森林オームなんだ」

「森林オームですか。えっ。それは、どういうことですか」

「君が、レモネード・チャンと言うペンネームで作品を書いたように、私は森林オームというペンネームで、「歌姫」という書いたんだ。ある作家に敬意を表してね。インスパイアされた作品を書くたびに、ペンネームも変えて行くんだ」

「そうなんですか。でも、何で、森林オームなんですか」

「私は、明治から昭和初期の文豪を敬愛しているんだ。それに、「森林オーム」と「歌姫」という言葉から想像がつくだろう。レモネード君は、探偵だろう。謎を解くのは得意じゃないか」

「僕は探偵ではありません」

「でも、探偵小説を書くんだから、探偵以上に探偵じゃないかな」

秋鼻さん、いや森林さんが、森の中に誘いこむように笑った。良太は脱稿した後は良太に戻っていたが、再び、レモネードに戻って顎に手をやった。歌姫なら、歌手の中島みゆきだけど、文豪ではない。森林だなんて、植物学者かなあ。牧野っていう人はいたなあ。明治からの文豪か。あっそうか。

「森鷗外の舞姫ですか」

レモネードは顔を輝かせながら、一気飲みした後にゲップをしたかのようにすかさず回答をした。

「さすがは、私立探偵レモネード・チャン。お見事だ」

怪人二十四面相ばりに、森林さんは大げさに手を広げた。

「私も、今回は、文豪シリーズを卒業して、「縦溝悪史」として、「八十八か所巡り殺人事件」でも書いてみようか」

「横溝正史の八墓村のレスペクトですか。それ、いいですね」

「今度、ポッパーに提案してみよう」

「それなんですけど。いちいち、ポッパーに相談しないといけないんですか」

「それはそうだ。私たちの本を出版するかどうかは、最終的には、ポッパーが権限を握っているんだ。いくら書いても、出版されなければ、意味がないだろう」

「でも、相手は、機械、いや、AIでしょう。大統領や総理大臣でもないのに、そんな相手に命令というか、指示というか、お伺い、忖度しないとイケないのは、癪ですね」

レモネードから戻った良太は、額に三本の皺を寄せた。

「しっ。天井に監視カメラあり。床に盗聴器ありだ。発言に気をつけないとイケないぞ。それにポッパーは、いや、AIは、様々な情報を大量に収集して、何が受けるか、何がヒットしているかを分析しているんだ。AIだろうが、人間の編集者だろうが、作家に的確に助言できることが重要なんだ。いくら小説を書いても、人に読んでももらえないことには、ただの時間の浪費でしかないだろう」

森林さんは、一旦、地表に出た竹の子が地面に引っ込んだかのように、首をすくめた。

「そりゃ、そうですけど・・・」

良太は、客観的に、なぜ、自分が小説を、物語を書くのかを考える。有名になりたいから、印税

が入るから、ただ、書きたいから、他にすることがないから、他に何もできないから、だけど、何かをしたいから、など、様々な思いが、洗濯機の渦の中の泡のように、結びかつ消え、消えかつ結んでいく。いくら洗剤を投入しても、その思いはきれいになることはない。心の中で渦が巻き続けるだけだ。

その時、画面に一通のメールが届いた。

「お疲れ様です。書店では、レモネード・チャンの「小さな目覚めから、短い出会いで、こんにちは、憎き人」は好評です。二回目の土壌を入れ替えましょう。次は、「アガサ・クリスティ」の「そして誰もいなくなった」のリスペクトで、「アサガオ・デ・モーニング」の「だからみんなが集まった」にしましょう」

このメールを見て、良太はぶっとんだ。いくらなんでもメチャフリだ。それに、二回目の土壌を入れ替えるじゃなくて、二匹目のどじょうを狙うだろう。それにしても、急な提案、命令だ。頭がついていかない。どんな作品にしようか、砂粒ほども内容は思い浮かばない。

頭の中が真っ白になったまま周りを見渡し、助けを求めるように仲間の様子を伺う。森林さんの横に何気なく立つ。チラッと横目で画面を見る。

題名は「キンチョールに吹かれて」と打ち込まれていた。なんだこれは。ペンネームは「森林太郎」から「五木ぶり尾」に変わっている。何をテーマにした小説なんだろうか。ペンネームは魚関係のようだが、題名は某殺虫剤会社のユニークなコマーシャルで誰もが知っている製品名だ。良太にもその作品の内容が思い付かない。当事者の五木さんも当惑しているのか、指が固まったままだ。一行も進んでいない。画面上の原稿用紙は白紙のままだ。その白さがパソコンから机、部屋中に広がっていくように思えた。

「いや。魚じゃないんだ。ごきぶりの視点で人間社会を風刺しろとのポッパーからの指示なんだ。夏目漱石の「吾輩は猫である」に匹敵するような作品を書いてくれとのことだ。夏目漱石と五木寛之を足して2で割るようなハイブリッドな、アウフヘーベンした小説をどう書けばいいんだ・・・」

さすがのAI出版でベストセラー作家の秋鼻旧児ならぬ森林太郎ならぬ五木ぶり尾氏でも頭を抱え、考える人も悩める人も通り過ぎ、白い部屋に脳を侵食されたかのように、白痴になっていた。